プレスリリース

平成１８年１０月２６日
水　　産　　庁
独立行政法人 水産総合研究センター

平成１８年度第１回対馬暖流系アジ・サバ・イワシ長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合センター
西海区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(２００６年１０月～２００７年３月)

海況

(1) 薩南海域における黒潮北縁域の位置は、「屋久島南付近での変動（平均的な位置）」で経過する。
(2) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表層水温は、「平年並み～やや高め」で経過する。

漁況(来遊量水準)

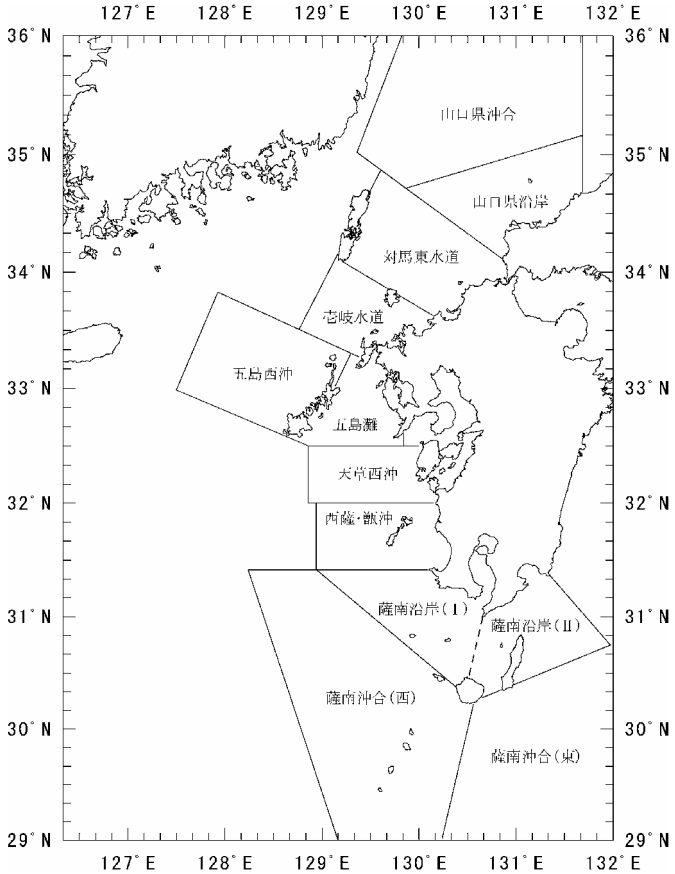
(1) マアジは前年を下回る。
(2) マサバは前年並み。
(3) ゴマサバは前年を下回る。
(4) マイワシは極めて少ない。
(5) ウルメイワシは前年を上回る。
(6) カタクチイワシは前年並み。

問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課 沿岸資源班　担当：青木、田中、佐藤
〒100-8950　東京都千代田区霞が関1-2-1
電話：03-3502-8111(内線7375)、直通電話：03-3501-5098、ファックス：03-3592-0759
電子メール：yuusuke_satoh@nm.maff.go.jp
独立行政法人水産総合研究センター 西海区水産研究所 業務推進部
〒851-2213　住所　長崎市多以良町1551-8
電話：095-860-1600　、ファックス：095-850-7767　、電子メール：snf-suisin@ml.affrc.go.jp

なお、本予報は水産庁のホームページ(http://www.jfa.maff.go.jp/release/index.html)、水産総合研究センターにおける我が国水域資源調査推進委託事業のホームページ(http://abchan.job.affrc.go.jp/)、及び西海区水産研究所のホームページ(http://www.snf.affrc.go.jp/)に掲載されます。

予報対象海域



参 画 機 関

山口県水産研究センター	沖縄県水産海洋研究センター
福岡県水産海洋技術センター	社団法人　漁業情報サービスセンター
佐賀県玄海水産振興センター	水産庁　増殖推進部　漁場資源課
長崎県総合水産試験場	独立行政法人　水産総合研究センター 西海区水産研究所
熊本県水産研究センター	
鹿児島県水産技術開発センター	

平成18年度第1回東シナ海長期海況予報

1. 今後の見通し(2006年10月～2007年3月)

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域の位置は、「屋久島南付近での変動」で経過する。

(2) 表層水温

山口県沿岸・沖合、対馬東水道、壱岐水道、五島西沖、五島灘、天草西沖、西薩・甑沖、薩南沿岸、黒潮域、沖縄島周辺海域、大陸棚上では、前半、後半ともに「平年並み～やや高め」で経過する。

2. 経過(2006年4月～9月)

1. 大陸棚上

(1) 海面水温

北部:4～6月「かなり低め」、7月「平年並み」、8月「はなはだ高め」、9月「やや高め」。

南部:4～7月「平年並み」、8・9月「やや高め」。

2. 黒潮流域

(1) 海流

沖縄北西方の黒潮の流路は、春季は「平年並み」、夏季は「やや離岸」。流量は、春季は「やや少なめ」、夏季は「かなり多め」で経過。

薩南海域における黒潮北縁域は、4～6月は「離岸傾向」、7～9月は「接岸傾向」で経過。

(2) 海面水温

4月「平年並み」、5月「かなり高め」、6・7月「平年並み」、8月「やや高め」、9月「平年並み」。

3. 対馬暖流域・沿岸域

(1) 表層水温

山口県沖合:4～6月「やや低め」、7月「平年並み」、8月「やや高め」、9月平年並み。

山口県沿岸:4月「平年並み」、5・6月「やや低め」、7月「平年並み」、8月「かなり高め」、9月「平年並み」。

対馬東水道:4月「平年並み」、5月「やや低め」、6月「かなり低め」、7～9月「平年並み」。

壱岐水道:4月「平年並み」、6月「やや低め」、8月「平年並み」。

五島西沖:6月「かなり低め」、8月「平年並み」。

五島灘:4月「平年並み」、6月「かなり低め」、8月「平年並み」。

天草西沖:4月「やや高め」、5月「平年並み」、6月「かなり低め」、8月「やや高め」。

西薩・甑沖:4月「やや高め」、5月「平年並み」、8月「やや高め」。

薩南沿岸:4・5月「平年並み」、8月「やや高め」。

薩南沖合:4月「平年並み」、5月「やや低め」、8月「かなり高め」。

沖縄島南東:6・8月「平年並み」。

(2) 表層塩分

山口県沖合:4月「平年並み」、5月「やや低め」、6月「平年並み」、7月「やや低め」、8月「かなり低め」、

9月「平年並み」。
山口県沿岸：4・5月「やや低め」、6・7月「平年並み」、8月「やや低め」、9月「平年並み」。
対馬東水道：4月「平年並み」、5・6月「やや低め」、7～9月「平年並み」。
壱岐水道：4・6・8月「平年並み」。
五島西沖：6・8月「平年並み」。
五島灘：4・6月「平年並み」、8月「やや低め」。
天草西沖：4～6月、8月「平年並み」
西薩・甑沖：4・5・8月「平年並み」。
薩南沿岸：4月「やや低め」、5月「平年並み」、8月「やや低め」。
薩南沖合：4月「やや低め」、5月「はなはだ低め」、8月「平年並み」。

3. 現況（2006年10月上旬）
(1) 大陸棚上
海面水温は北部・南部とも「平年並み」。
(2) 黒潮流域
薩南海域の黒潮北縁域は「屋久島南付近での変動」。海面水温は「平年並み」。
(3) 対馬暖流域
海面水温は「平年並み」。

(註) 引用符「　」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」	：	約22年に1回程度の出現確率
「かなり」	：	約7年に1回程度の出現確率
「やや」	：	約3年に1回程度の出現確率
「平年並み」	：	約2年に1回程度の出現確率

(資料)
黒潮流路模式図

東シナ海～日本海西南域あじ･さば･いわし長期漁況予報

今後の見通し（2006 年 11 月～2007 年 3 月）

対象海域：東シナ海～日本海西南海域

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0 歳魚（2006 年級群（2006 年生まれ））、1 歳魚（2005 年級群）、2 歳魚（2004 年級群）。魚の大きさは、あじ･さばは尾叉長、いわしは被鱗体長で表示。

1．マアジ

⑴ 来　遊　量：前年を下回る。

⑵ 漁期･漁場：沖合域の漁況は前年を下回り、沿岸域の漁況は前年並みで平年を下回る。

⑶ 魚　　体：10～19cm の 0 歳魚（豆･ゼンゴ銘柄）及び 19～24cm の 1 歳魚（小銘柄）が主に、24cm 以上の 2 歳魚以上（中･大銘柄）も漁獲される。

2．マサバ

⑴ 来　遊　量：前年並み。

⑵ 漁期･漁場：沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年･平年並み。

⑶ 魚　　体：25～28cm の 0 歳魚（豆銘柄）及び 29～32cm の 1 歳魚（小銘柄）が主に、32cm 以上の 2 歳魚以上（中･大銘柄）も漁獲される。

3．ゴマサバ

⑴ 来　遊　量：前年を下回る。

⑵ 漁期･漁場：沖合域の漁況は前年を下回り、沿岸域の漁況は前年を下回り、平年を上回る。

⑶ 魚　　体：25～30cm の 0 歳魚（豆･小銘柄）及び 29～33cm の 1 歳魚（小･中小銘柄）が主に漁獲される。2 月以降には、沿岸域で 33～40cm の 2 歳魚以上（中･大銘柄）が主に漁獲される。

4．マイワシ

⑴ 来　遊　量：極めて少ない。

⑵ 漁期･漁場：まとまった漁場は形成されず、散発的に沿岸域で漁獲される。

⑶ 魚　　体：15～21cm の 0～2 歳魚（中羽･大羽銘柄）が主に漁獲される。

5．ウルメイワシ

⑴ 来　遊　量：前年を上回り、平年並み。

⑵ 漁期･漁場：漁期前半を主体に、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

⑶ 魚　　体：15～25cm の 0～1 歳魚（中羽･大羽銘柄）が主に漁獲される。

6．カタクチイワシ

⑴ 来　遊　量：前年･平年並み。

⑵ 漁期･漁場：漁期は後半が主体で、漁場は沿岸域が中心となる。

⑶ 魚　　体：10cm 程度の 0 歳魚（大羽銘柄）が主に、5cm 程度の 0 歳魚（小羽銘柄）も漁獲される。

注：「前年」は 2005 年 11 月～2006 年 3 月。「平年」は過去 5 年の平均値。「沖合域」は大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2006 年 4 月～8 月）および今後の見通しについての説明

1. 資源状態

⑴ マアジ対馬暖流系群

東シナ海･日本海に生息するマアジの資源量は、1970 年代後半に低水準にあったが、1980～1990 年代前半に増加し、1993～1998 年には近年では高い水準を維持した。1998～2000 年の加入量減少のため資源は減少傾向を示したが、2001～2004 年の加入量は 1994～1997 年の水準に回復し、2002～2004 年には資源量も増加傾向を示した。しかし、2005 年の加入量水準は高くなかったとみられ、2005 年の全体の資源量はやや減少した。東シナ海･日本海（青森県～鹿児島県）での我が国のマアジ漁獲量は、1973～1976 年には 9～15 万トンであったが、その後減少し、1980 年に 4 万トンまで落ち込んだ。1980～1990 年代は増加傾向を示し、1993～1998 年には約 20 万トンを維持したが、1999～2002 年には 13～16 万トンに減少した。2003 年から漁獲量は再び増加し、2004 年には 19 万トンであったが、2005 年には 14 万トンに減少した。

⑵ マサバ対馬暖流系群

東シナ海･黄海･日本海に生息するマサバの資源量は、1970･80 年代には比較的安定していたが、1992～1996 年に増加傾向を示した後、1997 年に急減し、1999～2005 年は低い水準にある。東シナ海･黄海･日本海での我が国のマサバ漁獲量は、1970 年代後半には 27～30 万トンであったが、その後減少し、1990～1992 年には 13～15 万トンと大きく落ち込んだ。1993 年以降、漁獲量は増加傾向を示し、1996 年には 41 万トンに達したが、1997 年には 21 万トンに大きく減少し、2004 年には 83 千トン、2005 年には 87 千トンと低い水準にある。

⑶ ゴマサバ東シナ海系群

東シナ海から日本海西部に分布するゴマサバの資源量は、1992～2004 年に比較的安定して同程度の水準を保っていたが、2005 年に増加した。東シナ海･日本海での我が国のゴマサバ漁獲量は、年変動はあるものの、1980 年代以降およそ 5 万トン前後で推移している。1999 年に近年で最高の 88 千トンが漁獲された後、再び 5 万トン前後の漁獲が続いたが、2004 年には 31 千トン、2005 年には 70 千トンと、近年は変動がやや大きい。

⑷ マイワシ対馬暖流系群

東シナ海･日本海においてマイワシは、1980 年代後半から 1990 年代前半にかけて多く漁獲されたが、その後、急激に減少した。2001～2003 年に漁獲量は 1 千トン程度で推移した。1999 年には、0 歳魚がやや多く漁獲され、資源状態は低位ながらも一時上向いたが、その後は減少し、近年は極めて低位にある。海域によっては水揚げ量が前年を上回るところもあるが、全体として資源は低水準である。

⑸ ウルメイワシ対馬暖流系群

1990 年代以降では、2000 年まで資源は漸減傾向にあったが、2001～2002 年の加入量が以前

よりも多かったため、一時的に資源は上向いた。2003 年以降は再び漸減傾向で推移しているとみられる。2006 年の春季に鹿児島県においてやや多くの水揚げがみられたが、1･2 歳魚(2005･2004 年級群)であった。2006 年級群は 2005 年級群と同程度の豊度と考えられる。

⑹ カタクチイワシ対馬暖流系群

1990 年代以降では、1995～1996 年および 1998～2000 年にかけて資源は高水準で推移した。2001 年の夏季までは沿岸域を中心に好漁が続いていたものの、2001 年秋季から 2003 年春季までは加入量が少ない状態が続いていた。2003 年秋季以降はやや好漁となっている海域が増えている。2005 年および 2006 年とも 1 月以降に大羽イワシを主体に漁況が上向き、両年とも春季発生群の加入はやや良かった。

2. 漁況の経過

2006 年 4～8 月の大中型まき網漁業の漁場は、対馬沖、五島西沖、東シナ海中部および東シナ海南部が中心であった。この間の大中型まき網漁船の九州主要港への水揚量は、全魚種合計 3 万 6 千トンで前年（2005 年 4～8 月）の 6 万トンを下回った。マアジは 1 万 8 千トンで前年（2 万 8 千トン）を下回り、さば類は 9 千トンで前年（2 万 4 千トン）を下回った。

山口県～鹿児島県地先における沿岸漁業の漁況は、表 1 のような経過であった。マアジの漁獲量は、海域により差があるが、全体的には前年並みで平年を下回った。漁獲の主体は 15～25cm の 1 歳魚であった。マサバは、海域によって差があるが、概ね前年並みで平年を上回った。漁獲の主体は 30cm 以下の 0～1 歳魚であった。ゴマサバは、好調であった前年並みで平年を上回った。32～35cm の 2 歳魚を主体に 32cm 以下の 0～1 歳魚も漁獲された。マイワシは、山口県と福岡県で前年を上回ったが、その他では前年と同様に極めて低調に推移した。全体としては前年を上回り、平年並みであった。漁獲の主体は 15～21cm の 1～2 歳魚であった。ウルメイワシは、不漁であった前年を大幅に上回り、平年を上回った。4～5 月は体長 16～24cm の 1～2 歳魚主体で、6 月以降に 6～20cm の 0 歳魚が主体となった。カタクチイワシは、山口県で前年を上回り、全体としては前年･平年並みであった。4～5 月は 8～12cm の 0～1 歳魚が主体で、6 月以降は 5～10cm の 0 歳魚が主体となった。

3. 今後の見通しの説明

⑴ マアジ

例年、11～3 月期には 0 歳魚（豆･ゼンゴ銘柄）が漁獲の主体で、1 歳魚（小銘柄）、2 歳魚以上（中･大銘柄）も漁獲される。2005 年級群は 2004 年級群より豊度が低いと考えられる。2006 年級群については、2006 年 2～4 月に東シナ海南部～九州沿岸域で行った仔稚魚分布調査では、稚魚分布量は前年を下回った。一方、6 月に東シナ海～山陰沿岸域で行った幼稚魚分布調査の結果からは、2006 年級群は 2005 年級群をやや上回る豊度と考えられた。しかし、8 月に行なわれた計量魚群探知機を用いた分布調査での現存量推定値は前年並みであった。これらから、0 歳魚（2006 年級群）は前年並みで、1 歳魚（2005 年級群）は前年より少なく、2 歳魚（2004 年級群）は前年よりやや少なく、全体の来遊量は前年を下回ると見積もられる。

沖合域の漁況の指標となる大中型まき網の CPUE（1 日 1 隻当り漁獲量）および沿岸域の漁況の指標となる代表的な沿岸漁業の漁獲量（参考図参照）は、近年比較的高い値で推移していたが、2005 年は減少している。来遊量が前年を下回ることを反映して、沖合域の漁況は前年を下回り、沿岸域の漁況は前年並みで平年を下回ると考えられる。

⑵ マサバ

例年、11～3 月期には 0 歳魚（豆銘柄）と 1 歳魚（小銘柄）が漁獲の主体となるが、2004 年級群の豊度が近年では比較的高いため、2 歳魚（中銘柄以上）も漁獲の主体となる。2005 年級群の豊度は 2004 年級群より低い。2006 年級群の評価は難しいが、漁況の経過から、2005 年級群と同程度の豊度とみられる。これらから、0 歳魚（2006 年級群）は前年並み、1 歳魚（2005 年級群）は前年を下回り、2 歳魚（2004 年級群）は前年を上回り、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

近年、沖合域･沿岸域ともに、漁況の指標は低い値で推移している。来遊量が前年並みであることを反映して、沖合域の漁況は前年並みで、沿岸域の漁況は 0 歳魚が漁獲の主体となり、前年･平年並みと考えられる。

⑶ ゴマサバ

例年、11～3 月期には 0 歳魚（豆･小銘柄）と 1 歳魚（小･中小銘柄）が漁獲の主体となる。2005 年級群の豊度は高い。2006 年級群の評価は難しいが、漁況の経過から、2005 年級群より低い豊度とみられる。これらから、0 歳魚（2006 年級群）は前年を下回り、1 歳魚（2005 年級群）は前年と同程度で、全体の来遊量は前年を下回ると考えられる。

来遊量が前年を下回ることを反映して、沖合域の漁況は前年を下回り、沿岸域の漁況は好調であった前年を下回るものの、平年を上回ると判断される。

⑷ マイワシ

2001 年に東シナ海、日本海における産卵調査の結果が過去最低となり、この頃の沿岸域におけるマイワシの水揚げ量は極端に低かった。ただし、2002 年に沿岸域での漁獲量は底打ちとなり、その後は前年を上回る水揚げ量で推移してきたが、2000 年以前に比べると依然として極めて低水準である。今後は、0 歳魚の加入量によって来遊水準が決まると考えるが、2006 年のマイワシの卵豊度も低いので期待できない。

⑸ ウルメイワシ

2001～2002 年に当歳魚の加入がやや良く、来遊水準は一時上向いたものの、その後は漸減傾向が続いている。2006 年夏季に行った計量魚群探知機調査では、前年を下回り漸減傾向を裏付けた。ただし、鹿児島県では春季にウルメイワシの来遊水準が高かったため、2006 年 4～8 月における水揚げ量は前年を大きく上回った。10 月以降の来遊水準は 4～8 月の水揚げ量と正の相関を持っていることから、少なかった前年を上回るが、平年並みとなろう。

⑹ カタクチイワシ

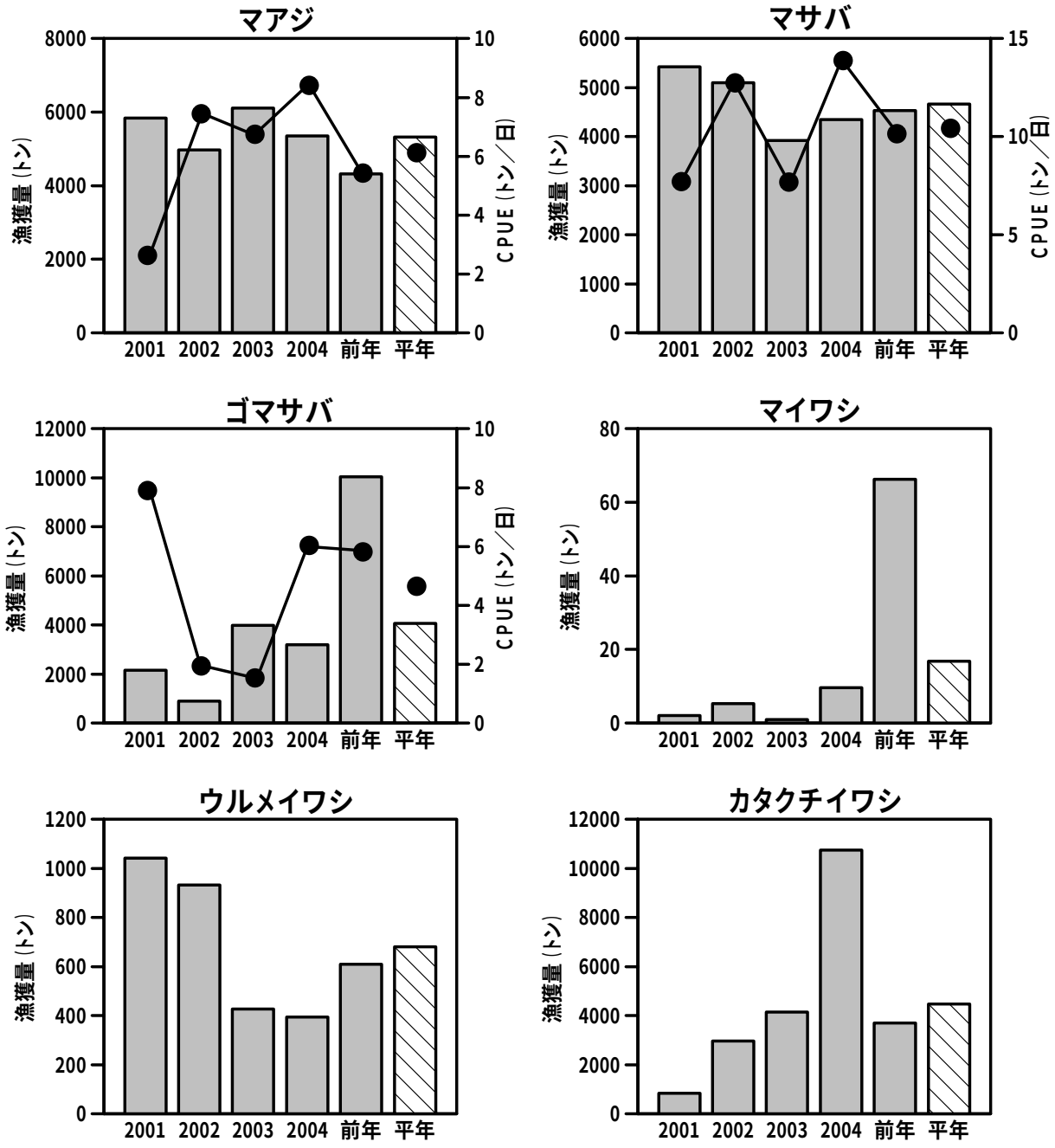
2005･2006 年の 1～3 月に大羽イワシの来遊が多く、そのため両年の春季発生群の加入はやや良かった。ただし、2006 年夏季に行った計量魚群探知機調査では、前年を大きく下回っている。また、4～8 月の来遊水準と 10 月以降の来遊水準は負の相関を持つこと、および五島灘の 1 月下旬の水温偏差と 10 月以降の来遊水準が正の相関を持つことから、来遊水準が上回ることは考えにくい。今後は 2007 年冬季に大羽イワシがどの程度来遊してくるかにかかっているが、2006 年春季発生群の加入は良かったため、来遊水準は前年･平年並みと考えられる。

表 1. 沿岸域の漁況経過（2006 年 4～8 月、一部 9 月を含む）

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
山口	中型まき網で 2,274 トンの水揚げがあり、前年比 117%、平年比 137%であった。湊地区の浮敷網（棒受網、すくい網）では、ゼンゴが 6～7 月に 1 トン水揚げされ、前年比 60%、平年比 2%であった。江崎地区の小型まき網ではトウマゴ・ゼンゴ・マメアジが 6～8 月にかけて 4 トン水揚げされ、前年比 26%、平年比 41%と大幅に下回った。	中型まき網で 16 トンの水揚げがあり、前年比 9%、平年比 9%で前年・平年を大幅に下回った。湊地区の浮敷網では 1 トンが水揚げされ、前年比 17%、平年比 4%と大幅に下回った。江崎地区では全く水揚げされなかった。	
福岡	代表港まき網漁獲量は 952 トンで前年比 148%、平年比 107%と平年並み。小・ゼンゴ銘柄が中心。棒受網は 192 トンで前年比 385%、平年比 138%とやや好漁であった。銘柄は小とマメが主体であった。	代表港まき網漁獲量は 274 トンで前年比 710%、平年比 214%と好漁。銘柄は中・ギリが中心。棒受網での漁獲量は 1.2 トン。まき網同様ギリ銘柄の漁獲が多かった。	代表港まき網の漁獲量は 16 トンで、前年比 345%、平年比 241%と好漁であった。
佐賀	前年並みで、平年を下回った。（前年比 102.3%、平年比 84.6%）	不漁であった前年を大きく上回り、平年を上回った。（前年比 828.9%、平年比 163.8%）	
長崎	前年並みで、平年を下回った。（前年比 97%、平年比 75%）	地域により差があるが、概ね前年・平年を上回った。（前年比 134%、平年比 153%）	
熊本 牛深港	78.4 トンの水揚げがあり、前年比 326.3%、平年比 30.7%で、前年を大幅に上回り、平年を下回った。	349.2 トンの水揚げがあり、前年比 55.5%、平年比 144.8%で、前年を下回り、平年を上回った。	
鹿児島	期間中、豆・小・中アジ（2005 年級群）及び中アジ（2004 年級群）主体で、6 月以降はアジ仔（2006 年級群）が加入した。期間中合計で、1,056 トンの水揚げで、前年・平年を下回り推移した。（前年比 72%、平年比 47%）		期間中、中小・中（2005 年級群・2004 年級群）主体で、7 月以降は豆・小（2006 年級群）が加入した。4～6 月は前年・平年を上回り、7～9 月は好調であった前年を下回り、平年を上回り推移した。期間中合計で、13,061 トンの水揚げで、前年並みで平年を大きく上回った。（前年比 90%、平年比 233%）

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
山口	中型まき網での水揚げ量は6～8 月に 4 トンで、前年比306%、平年比44%と前年を大幅に上回り、平年を下回った。湊地区では 7、8 月に浮敷網でヒラゴが79トン水揚げされ、前年比 819%、平年比 2,482%と前年･平年を大幅に上回った。昨年、水揚げが見られなかった江崎地区では、8 月にまき網で0.315 トンが水揚げされ、平年比 123%であった。	湊地区の浮敷網の水揚げ量は151トンで、前年比 74%、平年比 60%と前年･平年を下回った。江崎地区では 8 月に小型まき網で 4 トン水揚げされ、前年比 513%、平年比 94%と前年を大幅に上回り、平年並みであった。	湊地区の浮敷網の水揚げ量は 1,854 トンで、前年比128%、平年比 141%と前年･平年を上回った。このうちカエリ銘柄は 8 月現在で過去 40年の水揚げ量の年計を上回り、最高記録となっている。江崎地区では 6～8 月にすくい網、小型まき網で153トンが水揚げされ、前年比 301%、平年比 89%と前年を大幅に上回り、平年並みであった。
福岡	代表港まき網の漁獲量は 24トンで前年比 990%、平年比188%であった。棒受網では2.6 トンで、前年比 2,142%、平年比 1,028%であった。	代表港まき網の漁獲量は245 トンで前年比 187%、平年比 253%と好漁であった。一方、棒受網では全く漁獲されなかった。	棒受網の漁獲量は 6.5 トンで、前年比 42 %、平年比14%と著しく不漁であった。
佐賀	水揚げなし。	前年･平年を大きく下回った。(前年比 8.4%、平年比8.1%)	豊漁であった前年を下回ったものの、平年を上回った。(前年比75.3%、平年比128.2%)
長崎	前年同様、漁獲は低調に推移した。	前年･平年を上回った。(前年比 629%、平年比 154%)	地域により差があるが、概ね前年･平年並みであった。(前年比 90%、平年比 102%)
熊本 牛深港	3.6 トンの水揚げがあり、前年比 42.1%、平年比 40.2%で、前年･平年を下回った。	765.5 トンの水揚げがあり、前年比 1029.8 %、平年比148.7%で、前年･平年を大幅に上回った。	309.0 トンの水揚げがあり、前年比 17.9%、平年比 19.3%で、前年･平年を大幅に下回った。
鹿児島	まき網では 1.0 トンの水揚げで、前年比 29 %、平年比4%と低調に推移した。棒受網では大隅半島東岸で 20.1トンの水揚げがあり、前年比1,005%、平年比 300%となった。	4～6 月に大羽(2005 年級群･2004 年級群)のまとまった来遊が見られ、まき網では1,222 トンの水揚げがあり、前年比 955 %、平年比153%となった。棒受網では小中羽(2006 年級群)主体に 588 トンの水揚げで、前年比159%、平年比78%となった。	4～5 月は大羽群(2005 年級群･2004 年級群)主体で低調に推移したものの、6 月以降は小中羽(2006 年級群)主体に好調に推移した。期全体でまき網では 311 トンの水揚げで、前年比 98 %、平年比75%、棒受網では 354 トンの水揚げで、前年比 148%, 平年比 83%であった。

注:「前年」は 2005 年 4～8 月、「平年」は過去 5 年の平均値。



今後の見通し参考図

沿岸漁業の漁獲量（沿岸漁況の指標の一つ；棒グラフ）と大中型まき網の 1 日当たりの漁獲量（沖合漁況の指標の一つ；折れ線グラフ、CPUE）。沿岸漁業の漁獲量は、マサバは山口県～熊本県（ゴマサバを含むが主にマサバ）、ゴマサバは鹿児島県（マサバを含むが主にゴマサバ）、その他は山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。11 月～翌年 3 月。平年は過去 5 年平均。